

# 教職大学院での学び、附属学校での学びを公立校実践へ生かす実践 —中学校第2学年ハードル走の実践報告—

鷲野 祐一\* 鈴木 一成\*\*

\*岡崎市立矢作中学校

\*\*保健体育講座

## I 附属研究からの学び

愛知教育大学大学院教育学研究科の教科指導重点（造形・創造科学系）の授業（教材分析と授業実践開発B・C）の一部では愛知教育大学附属名古屋小学校及び中学校の授業研究に参観したり、大学院生と附属教員が協同的に授業を検討したりして、実践力の育成を図っている。2020～2023年年度は「学習環境のデザイン」を主題に、場の工夫や学習者の選択学習を対象とした。具体的には、体づくり運動の実践研究では、多様な動きが引き出される場の設定をいかに創るかが検討の対象となった。また、シュートゲームの実践研究では、子どもにとってのゲームの学びとは何かを主題に、子どもと教師が創る体育授業について考えてきている。こうした教職大学院での学びは、大学院授業内に完結することなく、附属学校の実践研究の特徴である「子どもと共に創り上げる授業」を公立学校での実践へと展開していくことまでねらいたい。

また、第一筆者である鷲野は2021年度附属高等学校の非常勤講師として、いかに子どもが競走に向かい自分の記録と向き合うことができるかを実践した。そして、一人一人が競走の楽しさを味わうことができるように、工夫し、実践した。こうした学びもまた、実践力育成に資する機会である。そして、附属高校での授業研究での学びを公立学校へ生かすことも大切であると考ええる。

そこで、本実践では、教職大学院での学びと附属学校での学びを公立校実践へ生かす実践を報告する。

## II 中学校第2学年ハードル走の実践

### 1 実践の概要

本実践では、2022年度中学校第2学年の子ども40名を対象として、教職大学院での学び、とりわけ、附属名古屋小中学校及び附属高校での学びを生かす実践を考案した。具体的には、「ハードル走の競走を軸として学びを深める授業」である。これは、全員が参加できる学習環境を整えることで、一人ひとりが競走の学びを深めることを目指した。そのためには、競走も競技規則を授業の中に持ち込むのではなく、子どもの学習状況に応じた多様な競走を展開することで勝利の未確定性を保障した。こうした学習環境のデザインは、目標に向かう挑戦の回数が増加し、結果として、個々のハードル走における競走の面白さにふれ、味わうことができると考えた。表1は本実践の単元計画である。

表1 単元指導計画

時	学習課題	学習活動
1	ハードルは、どのように跳ぶと良いのか考えよう。	・基本姿勢や安全管理について実際に行う。 ・ハードリングタイムのランクを提示し、個々の目標を立て、学習に見通しを持つ。
2	自分にあったインターバルを見つけよう。	・自分にあったインターバルを見つけるために、インターバルの異なるレーンで競走する。
3	リズムカルに跳ぶ方法を考えよう。	・ベアでの競走を通して、リズムカルに跳ぶ方法やハードリングタイムを向上するための工夫を考える。
4	スピードを維持して走る方法を考えよう。	・トムジェリ競走を通して、スピードを維持しながら、ハードリングタイムを向上させ、リズムカルに跳び越す方法について考える。
5	ハードリングタイムを上げるには、どうしたらよいか考えよう	・ハードリングタイムを向上するために、今まで行ってきた競走の中から自ら練習方法を選択し、学びを深めていく。

### 2 競走を中心とした全員参加の学習環境

#### (1) 子どもの技能差に応じた場の工夫

インターバルが異なるレーンの設定により個々の技能に応じるようにした。

#### (2) Jump Up シートの活用

単元を通して学習したこと（50m走の記録、

毎時のハードル走の記録と50m走との差、インターバル、自由記述による振り返り)を「Jump Up シート」と称した学習カードに記述することで、前時での学習を振り返り、反省点や改善点を次の学習に生かすことができるようにした。

### (3) 勝利の未確定性を保障する競走の提示

「ペアで競走」や「トムジェリ競走」など最後まで結果が分からない未確定性のある競走を取り入れることで白熱する競走の楽しさを味わうことができるようにした。「トムジェリ競走」は、ゴール付近で競り合うようにスタート位置を工夫し、合意形成を図ることができるようにした。

### (4) 具体的な目標の提示

図1は「ハードリングタイム」である。これを単元はじめに提示して、各自が毎時に明確な目標を定め、競走することで目標を達成する楽しさに気づくことができると考えた。

○ハードリングタイム     $\text{ハードリングタイム} = 50\text{mHタイム(秒)} - 50\text{m走タイム(秒)}$

ランク	SS	S	A	B	C	D	E	F
ハードリングタイム	0.5秒以内	0.6～1.0	1.1～1.5	1.6～2.0	2.1～2.5	2.6～3.0	3.1～3.5	3.6秒以上

図1 ハードリングタイム

## 3 授業の実際

### (1) 子どもの技能差に応じた場の工夫

インターバルが異なるレーンを設定することで、個々の技能に応じてインターバルを変更することができた。また、単元の途中においても変動する学習状況に応じた場の設定となったと考える。

### (2) Jump Up シートの活用

単元を通して記録の向上やインターバルの変容が確認でき、前時の学びを振り返り、次時の学びへとつなげる姿が見られた。第5時には「またがずに、全てのハードルを跳ぶことができるようになった」と自己評価する記述内容も確認できた。しかし、次時の学びへの見通しや課題の再設定等は課題となった。

### (3) 勝利の未確定性を保障する競走の提示

第2時は試しの計測、第3時はペアで競走、第4時はトムジェリ競走、第5時は本単元で

取り入れた競走を自由選択して単元を通して競走を中心とした展開とした。表2のように、ハードル走に苦手意識をもつ生徒AとCも、ハードル走及び運動に好意的な感想をもつ生徒Bも記録の向上が確認できた。勝利の未確定性を保障する競走は記録向上に期待できる。生徒Aは、「1回目の授業と比べると、ハードルに対する不安や怖さがなくなった気がする。機会があれば、またハードルをやりたい。」と述べた。多様な競走は記録の向上もさることながら、ハードル走の楽しさにも味わうことになったと考える。

表2 本単元における子どもの記録の変容

	第2時	第3時	第4時	第5時	ランクの変容
生徒A	11.6(+3.3)秒	11.3(+3.1)秒	10.7(+1.8)秒	10.0(+1.8)秒	E → B
生徒B	10.9(+2.4)秒	10.8(+2.3)秒	10.2(+1.7)秒	9.8(+1.3)秒	C → A
生徒C	18.0(+8.0)秒	22.0(+12.0)秒	20.0(+10.0)秒	15.4(+5.4)秒	F → F

### (4) 具体的な目標の提示

第1時に提示したハードリングタイムは50m走のタイムと50mハードル走の差から算出するため、一人一人目標も異なり自己の記録向上を目指して粘り強く取り組むことができた。生徒Aは、ハードリングタイムの速い仲間の走り越し方を参考にして動きを改善する姿が見られ、挑戦する一つの指標になる手立てであった。また、生徒Bは、ハードリングタイムのランクが向上することに意欲を示す場面があった。生徒Cは、記録を向上するために、スピードを意識する姿も見られた。これらのことから、ハードリングタイムは具体的な目標の提示となったと考える。

## Ⅲ 今後に向けて

本実践では、附属学校での実践研究で目にした本気になる姿、夢中になる姿があった。今後も、この姿を大切にしていきたい。そのためにも教職大学院での学びを紐解きつつ、毎年開催の附属学校園の研究・実践発表会にも足を運び、引き続き、体育科・保健体育科の実践力向上に努めていきたい。